

# 一栄谷 葛の 私見 異見



あらたな年度を迎え、農協改革は議論・検討の段階から自己改革実践のステージに入る。農協がいかなる転換を果たしていくのか、今度の総(代)会はきわめて重要な意味を持つ。

ここで筆者なりにあらためて自己改革の課題を整理しておけば、基本課題は二つとなる。一つは農業振興であり、もう一つは地域社会の活性化である。そしてこの二つを一体的にとらえ位置付けることができるからか、農協の存在意義や役割、また准組合員問題にも大きく影響してくる大事なポイントになるように思う。

一つ目の農業振興については、大規模化・効率化と輸出促進による攻めの農業、と経営安定対策による守りの政策は、一部のビジネス感覚に富む担い手を選別するだけで、中小零細規模の家族経営の脱落を促していくことになりかねず、農業の生産力低下にとまらず農村の活力低下も必至である。あくまで集落営農や法人化等によって多様な担い手を包摂し、それぞれに役割分担しながら、輸出志向というよ

りは消費者志向で、風土にあった地域性豊かな農産物を生産・販売していくべきである。こうした多様な担い手が参画できる地域農業をリードし、消費者との連携を強化していくことこそが協同組合としての農協にふさわしい。これを各種の事業機能を総合的に發揮していくことによつて支え、これらの結果として所得の確保・向上につなげていくことが

## 必要なら「地域社会農業」への あらためての注目

肝心である。二つ目の地域社会の活性化についてであるが、農業協同組合であるが故にその軸となるべきは食と農である。食はまずその地域で生産された素材を生かしての食文化を伝承していくとともに、シドゥクリ等によってあらたな食文化を創造していくことである。そして消費者の求める新鮮で安全・安心な農産物を提供していくと

ともに、農商連携によつて地域の商店・量販店等への出荷、食堂・旅館等への食材供給、食品工場への原料供給等により、地産地消をすすめる地域循環を作っていくことである。さらに食育によつて身土不二に基づく食生活こそが真の健康をもたらすものであることを浸透させていくことが必要である。そして農については、体験農園等による住民の農業参画によつて、子どもに限らず大人も含めて農業体験することによつて太陽と水と土のありがたさ、汗をかき体を動かしながら生命の不思議さに触れることの素晴らしさを実感させていくと同時に、園芸福祉等も含め農をつうじてあらたな地域コミュニティを再生していくことが求められる。

地域農業の振興と地域活性化を一体的に展開していくことは、TPPの流れの中で日本農業を守り、高齢化・過疎化が進行する農村を立て直していくためにきわめて重要であるが、振り返ってみればこれは1990年代はじめに吉田豊一郎氏が提唱した「地域社会農業」と重なる。地域社会農業は地域社会における生活と農業の一体的な関係を基礎として成り立つ農業を推進していくものである。准組合員対策云々というレベルの問題としてはなく、情勢は農協が地域社会農業に真剣に取り組むリードしていくことを促している。(農的社会学サイエンス研究所代表)